

【研究ノート 特集 立命館と戦争（立命館百年史を追補して）】

## 戦前の立命館中学校

史資料センターオフィス 西田 俊博

### 目次

- 第一章 明治・大正期における付属学校の英語教育とそれを支えた外国人女性教員
- 第二章 学園史の語り部「宮城方位標・日時計」物語
- 第三章 立命館中学校・高等学校 北大路校舎誕生物語
- 第四章 立命館中学校・商業学校の「御楯の井」  
―井戸にあらわれた中川小十郎の教育観―
- 第五章 付属学校と中等学校野球  
―学監小西重直と校長中川小十郎にみる体育・スポーツ（野球）観―

## 第一章 明治・大正期における付属学校の英語教育とそれを支えた外国人女性教員

### 第一節 明治・大正期における付属学校の英語教育

#### (一) 日本の学校制度の確立と付属学校の設立

日本の学校制度は、一八八六（明治一九）年四月からの一連の学校令公布によって確立されるが、その後にも何度かの改正が行われ、一九〇一（明治三四）年に施行細則が決められた結果、表一のように英語の週当たりの授業時間数も大きく増加されることになった（二）。

こうした流れのなかで、立命館中学校・高等学校の前身である清和普通学校が一九〇五（明治三八）年九月一〇日に京都法政大学の付属学校として創立されたのであった。

#### (二) 清和中学校の英語教育

創立当初の清和普通学校は、まだ中学校としての諸規定を満たしていなかったが、開校にあたっての生徒募集では、「外国語数学及び国語に力をいれた授業を行う」としていた（三）。

創立当時から上級学校への進学指導に独自の特色を出そうとしたようで、

表一 中学校令と立命館付属校での英語の週当たりの授業時間数の変遷

	1年	2年	3年	4年	5年	
1886（明19）年	6	6	7	5	5	尋常中学校ノ学科及其程度
1901（明34）年	7	7	7	7	6	中学校令施行細則
1906（明39）年	6	6	7	7	8	私立清和中学校規則
1911（明44）年	6	7	7	7	7	「中学校教授要目」改正
1914（大3）年	6	7	7	7	8	立命館中学学則
1919（大8）年	6	7	7	5	5	「中学校令」改正
1919（大8）年	7	7	7	6	8	立命館中学学則変更
1931（昭6）年	5	5	6	3	3	中学校令施行細則改正
1932（昭7）年	5	5	6	6	7	立命館中学校規則

一般の中学校基準に比べ上級学年になるほど英語の時間数を増やして、英語の指導に力を入れていた(表二)。

翌一九〇六(明治三九)年四月には中学校令による清和中学校として認可を受けたが、対外的な説明では上級学校への進学を第一に考えた教育を行う学校としていて(三)、この時の週あたりの授業時間数(表二)からも英語力の向上に特に力を入れようとしていたことがわかる。

清和中学校設立時の第一、第二学年の生徒総数は約六〇名ほどで、全教員六名のうち英語担当は吉村友喜(四)だけであった。設立二年目に吉村友喜は校長に就任しているが、英語の授業は継続して担当した。小規模な学校であったが、一九〇六年一月、文部省によって解散を命じられた吉田中学校から五学年二六三名もの生徒が転学してくることになり、急遽、英語教員二名(五)が増員された。ただ、英語教員だけを見ると、学校設立からの五年間(一九〇六年～一九一〇年)で採用一九名が退職一五名となっているが、このように移動が激しかった事情は清和中学校だけではなかった。当時の中学校教員の有資格者獲得が全国的にかなり困難であったために移動が頻繁で(表三)、清和中学校で在職一、二年に満たない教員が多数見られたのもそのためだったと考えられる(六)。

表二 1906年 清和中学校における週当たり授業時間数

	修身	国語及漢文	英語	歴史地理	数学	博物	物理及化学	図画	体操
第1学年	1	7	6	3	4	2		2	3
第2学年	1	7	6	3	4	2		2	3
第3学年	1	7	7	3	4	2		2	3
第4学年	1	6	7	3	4	2	3	1	3
第5学年	1	6	8	4	4				3

## (三) 清和中学校から立命館中学へ

一八九九年の第二次中学校令公布によって、一八九八（明治三一）年から一九一〇（明治四三）年に全国の中学校数は約二倍に、生徒数は約三倍以上に増加しているが（表三）、清和中学校の場合も同様で、生徒数は一九〇六（明治三九）年二八五名であったのが一九一二（明治四五）年には三六六名と増加することとなった。そのため、社会からの期待に応えるべく、新たな教育を追求する必要がでてきた。大正時代の始まりは、校名改称とともに大きな発展へとつながっていった。

一九一三（大正二）年、私立立命館中学（以下、立命館中学という。）に校名変更が認可され、これとほぼ同時に京都帝国大学から小西重直教授が学監<sup>(七)</sup>として迎えられた。後に、大正自由主義教育の西日本における旗頭と呼ばれた小西が、私立学校による中等教育全体の改造を志向する中川小十郎の期待をうけて、立命館の教育改革に大きくのりだすことになったのであった<sup>(八)</sup>。

その教育実践は確実に成果となってあらわれ、自由主義的風潮が広がる大正デモクラシーの時代に、立命館の新しい教育がようやく開花することとなった。学校全体が活気にあふれ、勉学とクラブ活動も盛んとなり、戦前では立命館中学の最もよき時代の姿が現れた頃であったといえる。当時の新聞には、自由主義的校風を報道する記事がいくつもあり、大正後期立命館中学が社会的に評価をうけていたことがわかる。

表三 全国の学校数・生徒数・教員数(公立私立中学校)の変化

	学校数	生徒数	有資格教員数	無資格教員数
1898 (明31) 年	135	61,381	1,440	1,139
1906 (明39) 年	269	108,019	3,639	1,667
1910 (明43) 年	301	193,646	4,517	1,341
1915 (大4) 年	241	141,215	5,153	1,371
1920 (大9) 年	366	176,411	5,505	1,673
1925 (大14) 年	404	295,901	8,737	2,953

日本帝国文部省 第26・27・28年報(抄)～第52・53年報(抄)より作成

- ①「三十余の教諭は帝大出身の文学士大半を占め慈母の愛児に対する如き切実なる教育振りと、如何にものんびりとした自由の空気が構内に漲って居ることは確かに一特色である」<sup>(九)</sup>
- ②「学校の特長としては(中略)中学としては比較的自由主義で束縛がない様だ、大学部と同じ場所で教を受くる関係上自由が過ぎてだらしなくなるのは立命館に限った訳ではない(後略)」<sup>(一〇)</sup>

#### (四) 大正期の立命館中学の英語教育

では、当時の立命館中学における外国語教育とはどのようなものであったのか。外国語教育については「教育内容の上進」で次のように書かれている(抜粋)。

- 「一、外国語科に於ける読解力を一層發達せしめ普通英字新聞、雑誌等を読解し得るに至らしむること  
同作文につきては尚一層實用方面に注意し特に通信文等の記述に習熟せしむること
- 六、外国語数学漢文等に対する課外の教授時間を増設し生徒の個性にに応じて一層その実力を發達せしむること
- 七、外国語は目下英語を課すれ共将来別に独逸語の学級を設くるか又は随意科として之を加設すること」<sup>(一一)</sup>

このように自由主義的校風のなかで、学校としても英語力の向上にはかなりの力をいれていたことがわか

る。

立命館中学では、一九一四年の「週あたりの英語授業時間」が第五学年で一時間増されている。この一時間の内容の詳細はわからないが、三年後の一九一七年に行われた編入試験（第二学年以上）の受験三教科（国語、数学、英語）に英会話が設定されていることや<sup>(二二)</sup>、卒業生同窓会での催し物<sup>(二三)</sup>の内容から考えて、上級学年に対しては実用的な英会話教育に力を入れていたであろうと考えられる。

## 第二節 英語教育を支えた外国人教員たち

### (一) 英語教育に関わった外国人教員たち

日本の教育の近代化は一八七二（明治五）年の学制発布から始まるが、初期の準備もレベルも大変遅れていたため、内容は輸入した外国の教科書で欧米文化を教授することが目的のようになっていた。そのため、外国人教員の需要は高かった。

社会的変化の時代にあつて、前述したように英語教育を強く打ち出していた清和中学校では、一九〇八（明治四二）年にカスバート（アメリカ）、ガツピー（イギリス）、サウター（イギリス）と三名の外国人教員が任用されている。このうちガツピーとカスバートは男性教員だが、二人の在職期間はなぜか短期間であつた<sup>(二四)</sup>。三人の在職期間は以下（表四）のようになっている。

表四

	1908 (明治41) 年	1909 (明治42) 年
カスバート	6月～8月退職	復職4月～9月退職
ガツピー	9月～	～3月退職
サウター	6月～9月退職	復職9月～

(二) 付属学校の英語教育を約二〇年間にわたって支え続けた女性教員サウター

既述の二人の男性外国教員に対して、女性のサウターの在職期間は、他の日本人教員と比較しても突出している。サウターは、一九〇八(明治四一)年六月に就職するも一旦退職し<sup>(二五)</sup>翌年九月に復職してから、外国人女性教員として長期に亘って勤務した。男子校の立命館中学でサウター以外に女性教員がいなかった環境で、なぜこれだけ長く勤めることができたのか(京都市内の中学校の教員履歴にはサウターらしき女性の名を見ることができが確定できない)。現在、彼女の経歴と人となりを知ることのできる資料が次の二点残されている。

① 「英国婦人。同地ロンドン出生。ケムブリッジ大学、ロンドン王立音楽学校及サウス、ケンシントン大  
学等に修行。明治四十一年六月本校英語教授を囑託し同年九月一旦退職の処、四十二年九月に再任し、  
爾後引続き今日に至る。」<sup>(二六)</sup>

② (前略) サウター先生ハ敬虔(語注 a) ナル基督信者ニシテ操履端正(語注 b) ニシテ嚴肅(語注 c)  
洽聞強記(語注 d) ニシテ氣象(語注 e) 快活実ニ英国婦人ノ典型ナリ。先生執務ニ熱心ニシテ教授  
ニ老練ナリ。故ニ初学ノ徒モ皆ヨク発音を学ビ英語学修上ノ進歩顕著ナリ<sup>(二七)</sup>

(語注 a) 敬虔：神仏をうやまう

(語注 b) 操履端正：平素の心がけや行いがよい

(語注 c) 嚴肅：おごそかでつつしみ深い

(語注d) 洽聞強記；智識や見聞が広く記憶力がよい

(語注e) 氣象；氣だて、性質

広小路学舎の清和中学校時代から北大路学舎の立命館中学校（一九二八年に校名を改称）時代にわたって勤めたサウターの姿は、一九一四（大正三）年の卒業生集合写真に写っているのが最初で【写真一】、一九一八（大正七）年の「立命館中学の過去現在及将来」【写真二】や一九二一（大正一〇）年発行の清和一〇号【写真三】の写真まで確認できるが、清和一二号には在職中の教員として氏名が掲載されているだけで、卒業写真にはその姿がない。

その後の存在としては、一九二八（昭和三）年四月の新聞記事に「中学校に女教員」という見出しで、立命館中学校にサウターと高田久榮の二人が京都市内の中学校で初の女性教員として紹介されている（二八）。この記事を読む限りでは、長く立命館中学校の英語教育を支えていたはずのサウターが、それまで教員として認められていなかったことになる。

一九二八（昭和三）年は、立命館中学校に中川小十郎校長が誕生し、禁衛隊が結成された年である。立命館中学校の歩みが大きく変わる時でもあった。その後の立命館中学校での英語教育がどのように進められたかは、残されている資料もなく知ることができない。サウターが、外国人女性教員として厳しい状況にあっただであろうことは想像される。彼女の名前が最後に見られるのは、「立命館学誌」第一四三号（一九三一年五月発行）の「中学校・商業学校生徒隊だより」で職員移動という最後のページの小さな見出し。たった三行

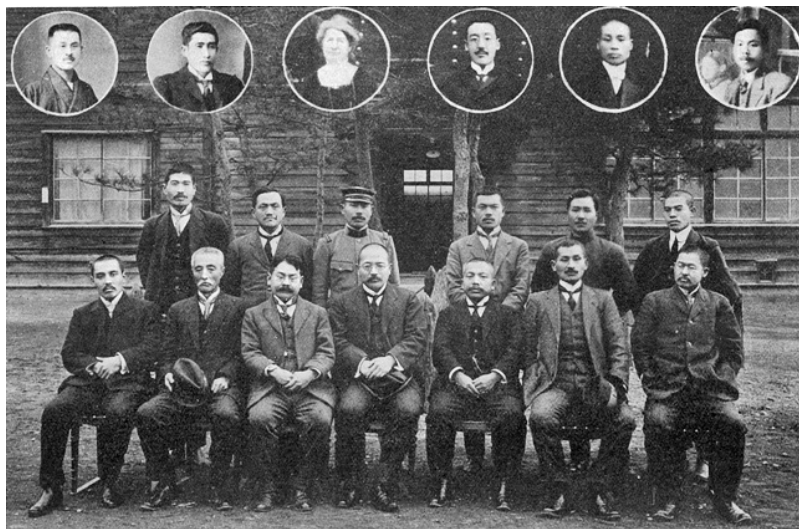


の記述で「サウター、高田久榮先生退職せられ」とだけ書かれている。この年の入学式では「入学禁衛隊入隊式」として挙行されたことが詳しく掲載されている。新学期の始まる前にサウターは職場を去っていたのかもしれない。

サウターが、最初の短期間を除いても、一九〇九年から一九三一年春までの二二年間、立命館の付属学校の英語教育に関わってきたことだけは事実である。後に詩人となった中原中也（在学期間一九二三～二四年）がサウターから学んでいたことも十分に考えられる。サウターは、ただ一人の外国人女性教員として明治から大正、そして昭和にかけて立命館の付属学校英語教育を支え続けたのであった。



【写真一】1914（大正3）年 第八回卒業生 記念写真  
同窓会誌「清和」第4号 最前列中央がサウター



【写真二】1918（大正7）年の全職員写真 顔写真左から三人目がサウター  
最前列中央が小西重直学監「立命館中学の過去現在及び未来」



【写真三】1921（大正10）年 第十五回卒業生 記念写真  
サウターが撮影された最後の写真 同窓会誌「清和」第10号

## 第二章 学園史の語り部「宮城方位標・日時計」物語

戦前、立命館中学校・商業学校（一九二九年設立）には日時計を兼ねた宮城方位標きやうじょうというものがあつた。皇居である宮城（九）を正しい方角で遥拝ようはい（一〇）することを目的として当時の中川小十郎校長の指示によって制作されたものであつた。現在は、立命館中学校・高等学校のある長岡京キャンパスに残されているのだが【写真四】、立命館学園にとっては貴重な歴史の語り部である「宮城方位標・日時計」を紹介する。



【写真四】 背後に JR 東海道線が走る現在の姿

### （一）宮城方位標建立の経過

一九三三（昭和八）年一〇月中旬、立命館中学校教員の坂井徳蔵（一一）が、中川小十郎校長（一二）の意向を伝えるに京都帝国大学の上田穰教授（一三）の研究室を訪ねた。用件は、「立命館では毎朝、皇居に向かって遥拝【写真五、六】をしているが（一四）、その方位が正確ではない。これを天文学的に計測して正確に決定してもらえないか」というものであつた。上田教授は即座に賛同し、理学士で助手の森川光郎に手伝うことを指示した。

方位を確定するには、天体観測によって正確な子午線を求めねばならず、その方法として子午儀と呼ぶ器械で夜間の星を観測し、そこから計算して求めることに決まつた。そして、求められた宮城方位は、頑丈な花崗岩の標柱を建て、その上に刻み付けることになり、それらすべてが上田教授に一任されたのであつた。

上田教授は、観測土台に使用したものを後に標石に用いることを考え、その土台となる花崗岩の大きさを



【写真五】「立命館禁衛隊」第30号 1932（昭和7）年11月発行



【写真六】朝拜（1933年中学校卒業アルバム）

六〇cm 正方で高さ一m と決めた。そして、この土台となる石を東西南北正確に置くための経緯儀観測が、一月二二日と二五日の二度にわたって行われ、標石は一二月初めに設けられた。

一月二七日、標石上に観測器械を据付け、校長室には無線電信受信機を組み立て、その夜からようやく観測を開始した。晴天の日でなければ観測できなかったため、日数は予定の二倍近くかかり、経度と緯度の観測が終了したのは一二月二七日であった。

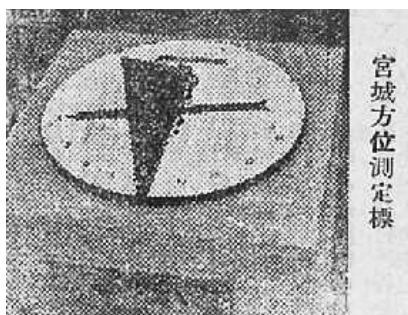
測定終了後、中川校長からは標高も求めることが追加された。この標高測定を実施したのが一二月三一日。アネロイド・バロメーター<sup>(二五)</sup>を用いて付近の水準点との比較測量を行えば容易なはずが、この水準点を確認するのが当時では困難だったようで、ようやくのことで見つけたし、この水準点と学校の標石の間を往復して測定を行ったのであった。その後、データ整理と計算にも時間をとられてしまい、完了したのは三月二〇日過ぎであった。

## (二) 日時計併設の経過

ここで、上田教授から「花崗岩の標石に矢を一本刻むだけでは惜しいので、これと兼ねて日時計を置いてはどうか」との提案がなされ、中川校長も賛成した。その後、製作所と打ち合わせにも二ヶ月近い時間を費やすこととなり、製作所が作業に取り掛かったのは七月にはいつてからであった。

一方、経度緯度などの数値を記すために、別に金属の文字盤を張り付けることが決まり、文案を上田教授が作成し、当時の新任教員吉田芳男<sup>(二六)</sup>が揮毫を担当することとなった。日時計の説明文字板は八月二三日

に完成して取り付けられたが、共に材質は砲金（二七）と呼ばれる硬い合金で作られていた。こうして宮城方位標を依頼されてから約一〇ヶ月の月日を要して、日時計と共に一九三四（昭和九）年八月に完成したのであった【写真七、八、九】。



【写真七】唯一の写真 1936（昭和11）年6月発行の「立命館禁衛隊」第65号



【写真八】現在でも文字がしっかりと読み取れる方位標



【写真九】全教職員・生徒による朝拝「立命館禁衛隊」第46号 1934（昭和9）年10月発行

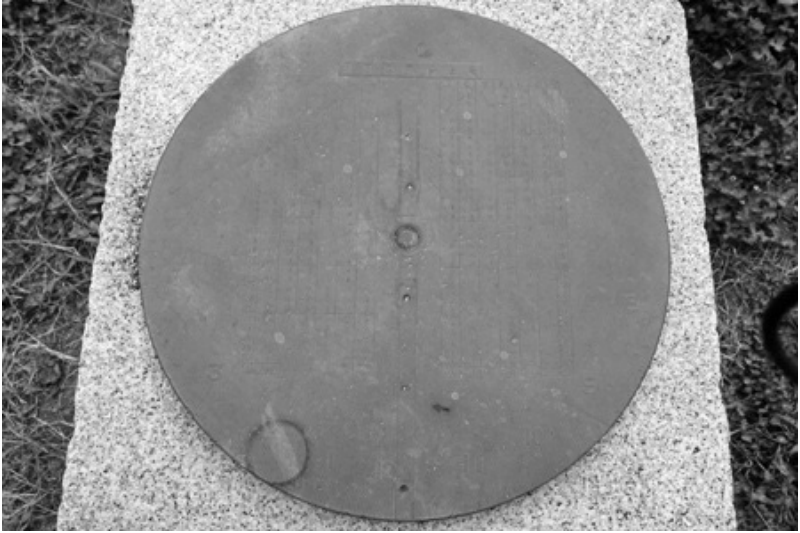
### （三）日時計の利用方法

日時計は文字通り、太陽によって知ることのできる簡易時計である。ここで紹介している日時計は、写真のように花崗岩の上に設置された丸い盤で、これが時計の文字盤に相当する【写真一〇】。八から四までの数字が時刻を表し、その数字の間を一二区分してある。その区分線で五分まで読み取れるようになっているが、

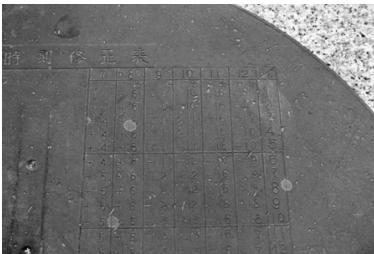
これが等間隔でないのは、影の動く速さが時間によって異なるからとされている。この円形平面盤の上に三角柱の金属が立っていて、日があたると三角柱の影が文字盤の上に落ちて時刻を見定めた。線と線の間に影が落ちた時は、大体の目分量で何分かを想像することになっていた【写真一一】。

文字盤の上には日晷時刻修正表とよばれるものが表示されていた。日晷とは太陽の陰という意で、昔は日時計のことをこのように呼んでいた。日時計の指す時刻は、毎日少しずつ違ってくるので、その違いだけを補正しなければならず、そのために修正表というものが必要となった。横の行が左から右へ一月二月……二月。縦の行は上から下へ一日二日……三十一日まで数えられるようになっていた。日時計は、この修正表の数値で補正すれば、一年中の時刻を知ることができたのであった【写真一二】。

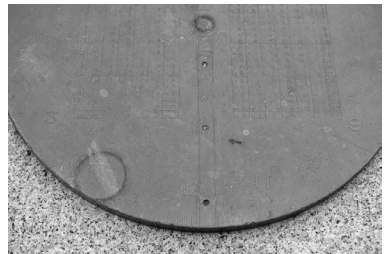
こうして完成し設置された宮城方位標・日時計であったが、日時計は天候に左右されるもので、また、授業の始業・終業合図は職員が鐘をつけて知らせていたので、日常の学校生活においては、それほど役割はなかったのではないかと思われる。また、立命館中学校・商業学校では、一九三八（昭和一三）年に校舎をすべて鉄筋三階建に改築した時、北校舎（商業学校）の最上部に時計が設置されていたので、日時計の役目もすでに終わっていたことになる。



【写真一〇】 宮城方位標・日時計の全面



【写真一二】 日晷時刻修正表



【写真一一】 宮城方位標の金具跡と時刻文字

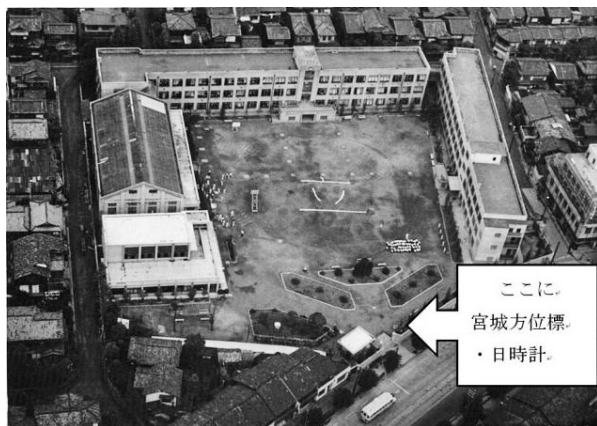


## (四) すべての役目を終えて

こうして、日時計までを兼ね備えて正確に製作された宮城方位標は、終戦によつてその役目がすべて終わり、戦後は、社会の復興と生徒たちの成長を見守るだけとなった【写真一三】。一九六四（昭和三九）年には、北大路通に面する校地南側に四階建の校舎が建築されることになり、一旦移動させられた宮城方位標は、日時計として北大路学舎正門を入った右側に移設された。存在を示すことができずには、中学校理科の授業で時折、日時計の教材として利用されたくらいであった。

一九八八（昭和六三）年七月には深草キャンパスが完成し、立命館の「歴史の語り部」としての役目がくるかもしれないと宮城方位標・日時計もそのまま新天地へと移設された。戦前には、生徒・教職員の先頭にあつて存在感を誇示していたが、深草のグラウンドの

階段横で、樹木に囲まれながら、生徒たちの元気な姿を見守り続けてくれたのであった【写真一四】。二〇一四（平成二六）年、立命館中学校・高等学校キャンパスは更なる展開のために長岡京市へと移転することになった。すでに役目を果たし終えていた宮城方位標・日時計は、線路と隣り合わせのキャンパスの片隅で、歴史の語り部として、西園寺公の石燈籠と共にひっそりと余生を送っている【写真一五、一六】。



【写真一三】北大路学舎全景 1960年



【写真一四】2012年深草キャンパス 第1グラウンド



【写真一五】長岡京キャンパス  
石燈籠とJR 東海道線をバックに



【写真一六】西園寺公望公旧邸の石燈籠

### 第三章 立命館中学校・高等学校 北大路校舍誕生物語

二〇一九年までに三度の移転を経てきた立命館中学校・高等学校が、京都法政大学の付属学校として設立されたのは一九〇五（明治三八）年九月一〇日で、その歴史の中で六六年間にわたり最も長く生徒たちを見守り、育ててきたのが北大路学舎（一九二二年八月～一九八八年七月）であった。

この北大路学舎でシンボルとなっていたのが南校舎で、一九六四（昭和三五）年九月の東京オリンピック開催の前月に竣工して、その後、一九八八（昭和六三）年の深草移転までの二四年間「新館」と呼ばれていた【写真一七】。

北大路学舎で生徒たちの生活の中心であったのは北と東の校舎棟（普通教室）であった。この校舎が、それまでの木造二階建から鉄筋コンクリート三階建に建て替えられたのは一九三七（昭和一二）年六月で、以来戦中戦後にわたり、昭和が終わるまでの五一年間校舎としての役目を果たしてきた。



1964 TOKYOオリンピック 記念

【写真一七】 北大路校舎 全景 1964年（南館竣工記念）

## 第一節 北大路学舎への移転

中学校が設置されてから一七年目の一九二二（大正一一）年、立命館中学は新天地への大移転を行った。それまで広小路にあって大学（夜間）と校舎を共用していたが、大学が大学令により正式に大学へ昇格するに伴い、昼間も学生の授業で校舎を使用しなければならなくなったことと、中学校の生徒数増で校舎が狭隘になったことが移転理由であった。

新校舎の所在地は上京区小山上総町（現在は北区）で、移転の二〇年ほど前には愛宕郡上賀茂村字小山と呼ばれる広大な田圃地帯であった。校舎が建てられてから運動場の狭いことに気付き、同窓会である清和会が慌てて田二反（約二〇ア）を購入して寄付したほどであった<sup>二八</sup>。運動場の東側には周辺の田に水をひくための小川が流れて水車を回していた。春には黄色い菜の花が木造校舎をつつみ、空気は澄んで常に涼しい風が教室から青田へと吹きぬける好適地であった。周辺には東南に真宗大谷大学（現大谷大学）、西南に師範学校<sup>二九</sup>があるくらいで、校舎二階の廊下に立てば、比叡山や植物園、鴨川が校庭の一部のように眺められ、教育環境としては理想的な地であったと言えるだろう【写真一八】。



【写真一八】北大路新校舎の校庭と生徒  
（その向こうに聳えるのが比叡山）

## 第二節 校舎建替えの必要性

一九三一（昭和六）年、当時の塩崎達人校長が「遠からずして学校はその外観設備を一新して、北大路通の一角に堂々たる壮容を誇示するに到ると思ふ」と予言した<sup>三〇</sup>とおり、田畑の真ん中に木造校舎が建設されてから一五年ほどで、立命館中学校は建替えられることとなったのであるが、その改築には二つの大きな理由があった。

### （一）入学者数減少対策

立命館では当時の社会情勢に應える目的で、一九二九（昭和四）年に北大路の校地内に商業学校を設立した。しかし、この年一〇月に皮肉にも世界恐慌が起こり、その猛威は日本にも厳しく押し寄せ、立命館中学校と新設間もない商業学校両校にも影響は深刻に現れた。それは、共に一五〇名の募集に対して志願者と入学者が表五のような数字であったことからわかる。

入学者が募集定員割れ、それも半数以下という状況によって教職員の生活まで圧迫されることになったが、これは他私学も同様で、入学者をいかに確保するかは当時の私学にとって最重要課題となったのである。この対応策として立命館ではいくつかの改修や改善が行われた。授業の開始終了を伝える時鐘は、それまで教



【写真一九】昭和8年正門からの校庭と校舎  
(正門前に立つのは市電のための電柱)

会式の点鐘だったのを電鈴式ベルに改められ、自転車置場が拡張整理された。また、この年から体育正課として剣道が採用されたことで、講堂は剣道専用道場になった。道場内部には西園寺公筆の扁額が掲げられ、その下中央には禁衛隊旗（立命館禁衛隊は一九二七年七月に結成）が、左右には校旗が立てられた。また、従来の銃器庫が木骨煉瓦とされたのであった（三三）。

当時の日本の学校教育は、教学内容を充実させるなど特色ある教育で他校に差をつけられるほどに進んでいなかったため、校舎の建替えなどの外観で目を引くことが、最も簡単な解決策であったのであろう。

こうして、一九三三年（昭和八）年一二月から中学校・商業学校両校の講堂が新築工事に入った。工事経費は七千円以上にのぼり、当時の学校財政としては大変苦しいものであったため、大学二階建の旧講堂百坪の木材を利用してこれに拡張が加えられた。これによって一月中に竣工し、二月一日の紀元節の日に落成式が挙行された。この新設の講堂では両校生徒全員が一堂に会し、清和会総会も将来的に開かれるという予定であった。

## （二）強固な校舎対策

もう一つの理由となったのが、一九三四（昭和九）年九月二日に京都市内を直撃した室戸台風であった。「昭和の三大台風」と言われるこの台風は、午前八時半頃に京都市内での最大瞬間風速四二・一m/秒の猛威

表五 各校三年間の志願者・入学者推移 （注三一）

	中学校			商業学校		
	1929年	1930年	1931年	1929年	1930年	1931年
志願者	234名	110名	51名	163名	154名	116名
入学者	157名	87名	46名	109名	139名	98名

をふるい、京都市内の小学校で児童一・二名教員二名の死者をだし、学校の倒壊一三校、大破三八校という京都の災害史上最悪の被害を残したのであった<sup>(三三)</sup>。

この被害をうけて、京都市内の公立小中学校では校舎の鉄筋コンクリートへの改築の必要性が急速に広がり、京都市もそのための予算化を急いだのであった。また、校舎周辺の開発が目覚しく、近接地に木造家屋の密集的建設が進み、火災の不安が高まっていたことも改築化を加速させていた。

立命館の学園関係者もこのことを痛感していて、翌年が学園創立三五周年でもあったことから、この記念行事の一つとして北大路校舎の建替え計画が具体的に進行していくことになったのである。

### (三) 将来を見通した対策

これら(一)、(二)に加えてさらに重要な位置づけとされたのが、戦時態勢への学校としての役割であった。一九二五(大正一四)年に陸軍現役将校学校配属令が公布されるや、立命館では逸早く申請書を提出している<sup>(三四)</sup>。一九三一(昭和六)年九月に満州事変が勃発したが、その翌年のカリキュラムでは、一年生から五年生までで週五時間(三〇時間～三五時間の授業時数)の体操・教練(軍事教練)が新設された。



【写真二〇】講堂建設前、旧校舎校庭での剣道授業  
(昭和初期)

このように軍事教練を率先して取り入れていた立命館では、その鍛えられた姿を広く市民へ誇示する場を設けていくことになる。一九三五（昭和一〇）年一〇月一、二日には、授業の中で当時の府下の学校に配属されていた将校、各校の教練担当教員など一〇〇名以上が招待されて、軍事教練の成果を防空演習として実施した。敵機空襲を想定して実物に近い高射砲、高射機関銃、聴音機などを駆使しての訓練で、京都府下では最大規模の演習として高く評価された。立命館中学校・商業学校は全国でも軍事教練の最先端学校に発展していくことになり、皇室中心主義の教育を進める学校として大きく新聞にも紹介されたのであった（三五）。

こうした実践を進めることと新校舎の建設とが、その後の生徒募集にとって大きな広報活動の役割を果たすこととなったのである。

### 第三節 期待される学校・校舎

鉄筋コンクリート校舎の建設は、生徒たちが毎日その進捗を目にする中で順調に進んでいった。当初の計画に加え、講堂（一階に銃器庫や医務局、二階に大講堂）も追加で建設されることになった。完成した講堂は、京都府下の学校にあって最大規模のものとして注目されることになった。また、医務局はレントゲンな



【写真二一】全校生徒による旧校舎校庭での行進練習  
（昭和初期）



どの診察器具を備えた立命館学園の最高医務施設で、全国の学校でも先進的な設備と体制を整えた学校になったのである<sup>(三三〇)</sup>。なお、図面にある西校舎は、後に上賀茂に設立される立命館第二中学校（戦後の神山中学校・高等学校）の校舎として移築利用されることになる。

①第一期工事 一九三七（昭和一二）年六月竣工

東校舎（中学校）鉄筋コンクリート三階建一八教室【写真二三】

②第二期工事 一九三七年一月着工で一九三八（昭和一三）年二月

末竣工

北校舎（商業学校）鉄筋コンクリート三階建二一普通教室

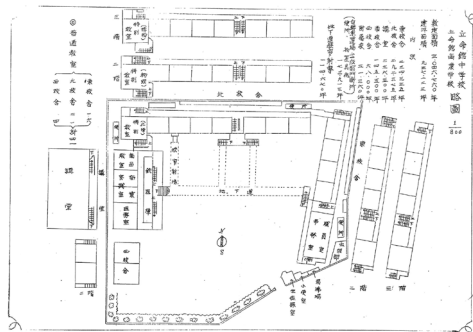
三特別教室【写真二四】

西校舎 一階 銃器庫、医務局【写真二五】、実験室、地歴教室

二階 大講堂（二二六坪で京都府下第一の規模）【写真二六】

地下 射撃場 地下道（生徒用食堂としても利用）

この新校舎は二千人が収容できるように建設されており、その設計には配属将校などの軍人の意見が多数採用された。地下には銃器庫と兵器庫があり、空襲の際には地下道が校舎をつなぐだけでなく防空壕の役割



【写真二二】鉄筋建替後の北大路学舎図  
(史資料センター所蔵 制作年不明)

も果たし、軍事教練として大事な射撃訓練が校内で実施できるように射撃場が設けてあった。年間で数発の実射を行う訓練は、通常の学校では校外の特別の場所まで出向いていたが、軍事教練を強調する立命館としては、地下射撃場が学校の看板的役割も果たしていた。つまり、北大路学舎は、将来の戦争に備えた軍事基地的要素をもって建設された学舎だったのである。

新校舎建築は、当時の金額で三〇余万円（現在では約四億円）を要する大工事であった。学園総長であり、中学校商業学校校長でもあった中川小十郎の決断を実現させるため、学園関係者も資金捻出のために苦心し、不足分には学債の募集が行われ、寄付集めのためだけの同窓会という印象をさけたいと考えていた清和会も、これには積極的に協力することとし<sup>三七</sup>、それでも不足する分については、銀行からの借入れまで行つた<sup>三八</sup>。

こうして耐火耐震も備えて完成した新校舎は、一九三七（昭和一二）年新学期から授業が開始された。この年はまた立命館の付属学校が大きく成長発展をする年でもあった。それは四月の夜間中学校（後に立命館第四中学校）と商業学校夜間部の創設である<sup>三九</sup>。当時の夜間中学校は、京都府内で二中（現鳥羽高校）と三中（現山城高校）の二校で、私学では立命館だけであった。創立者中川小十郎は学校創立時から勤労者教育を非常に重んじていたので、夜間学校の開設は教育者としての夢を更に広げるものであった。

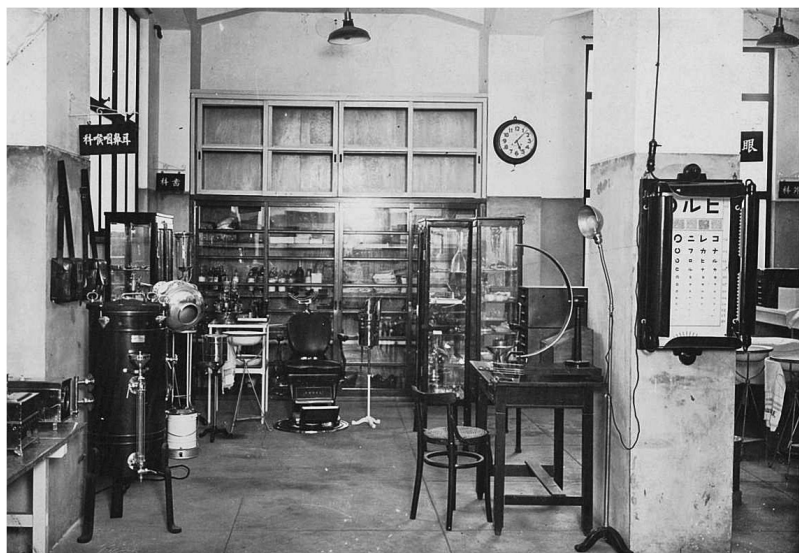
この年の中学校では募集一六〇名に対して入学者三二一名（志願者三五二名）、商業学校では募集一五〇名に対して入学者三一九名（志願者三八一名）で、生徒数は景気の回復とともに急増していった<sup>四〇</sup>。



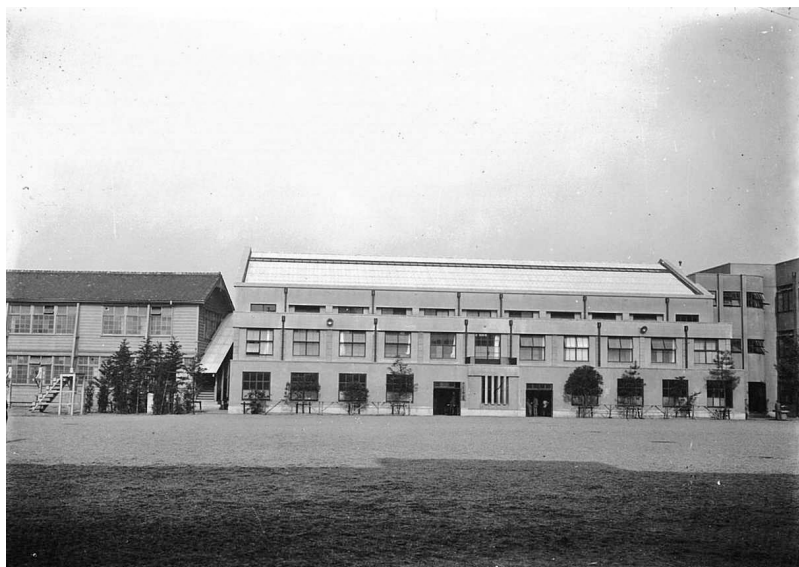
【写真二三】 東校舎



【写真二四】 北校舎前校庭に立つ中川校長  
(地面の四角形は地下道への光窓)



【写真二五】全国的にも最高の設備を備えていた医務局



【写真二六】講堂（2階が講堂、1階が銃器庫・医務局など）

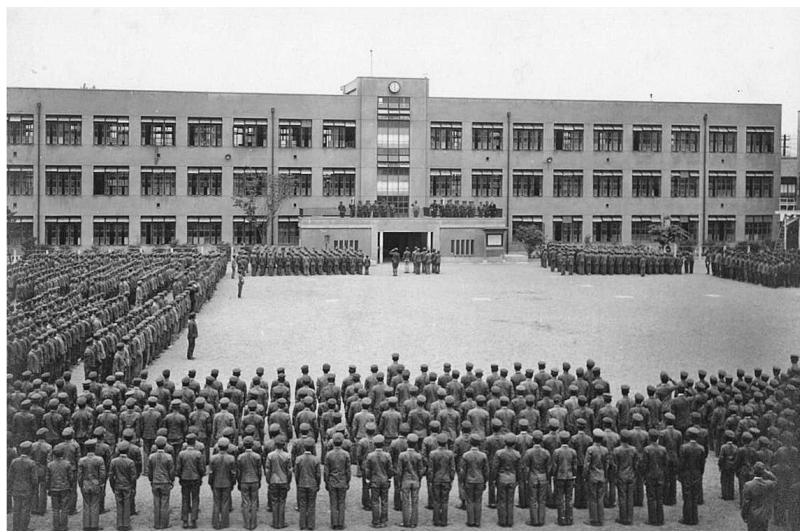
#### 第四節 戦争と北大路学舎

まだまだ瓦屋根の民家が多く、高い建築物がなかった昭和一〇年代の北大路烏丸に聳えるように建つ白いコンクリート三階建の校舎は、北大路通や烏丸通を走る遠くの路面電車からも大きなシンボルとして見えたことだろう【写真二七】。

学校のイメージともなる学校外壁の色の選択にも師団参謀部の意見を伺っていて、その結果は新聞で「最近徒らに美観のみを誇って敵機に素早く感知されるやうな明粧建築物の増加する折柄、目下建築中の立命館中学校が一朝有事の際を考慮してその建築外面を上空から感知されないやうな擬装色となすことになった」と紹介されていた<sup>(四二)</sup>。校庭（運動場）の色と同じように見せるために校舎の屋上には土が敷かれていた。校庭の隅には五百挺の小銃と弾薬が一時に隠匿できる地下室が設けられ、屋上には空襲監視の望楼が建設されるなどその徹底ぶりは、学舎としては突出していた【写真二八】。当時の新聞には「竣工の上は空襲戦時の有事に役立つ全国にも稀な模範的校舎として各方面から期待がかけられている」と賞賛されたのであった<sup>(四三)</sup>。多くの生徒たちが待ち望んだ新校舎であったが、なかには「その建築にすこしの建築美といふやうなものもなく、ただ単に昔ながらの学校風の建て方に流れてゐる事であった。（中略）平凡至極なひらべつたな細長い校舎を見て入るよりはそこにいく分なりとも芸術味を加味したものの加へられてゐる方が気分に変な差ができる」<sup>(四三)</sup>という生徒の失望の声もあった。



【写真二七】新校舎完成後の北大路学舎全景（昭和13年）



【写真二八】陸軍現役将校学校配属令公布15周年御親閲（昭和14年5月）

## 第五節　そして「さよなら北大路学舎」

北大路学舎は、戦争によって痛々しい姿に変わっていた。軍需生産の工場として機械をいれるために校舎の窓や扉は壊され、空襲を避けるため校舎の壁面に迷彩が施されていた。そして、生徒たちのうちで三年生以上は学徒勤労動員で各地の工場へ、二年生以下は農作業の手伝いに駆り出され、主役である生徒たちがいな学校になってしまったのであった。

それが、終戦となって生徒たちが戻ってきて、教職員と一緒にあって学校の再建へと歩みだした。一九四八（昭和二三）年から発足した夜間高校には、向学の意欲に燃える勤労青年たちが集まり、夜遅くまでこうと輝く教室の明かりは、戦後の北大路の夜の名物風景にもなった。中川小十郎の教育への夢は、戦後の新しい教育へも引き継がれていったのであった【写真二九】。

北大路学舎は、この地で戦後の平和と民主主義への歩みと共に、さまざまな苦難の道を乗り越えながら生まれ変わった。そして、その努力と成果を継承しながら、二一世紀を展望し教育内容をさらに充実させ、より良い学校環境で男女共学を実現していくために学校移転を決意した。

こうして北大路学舎は六六年の歴史に幕を閉じ、新しい教育への夢をもって一九八八（昭和六三）年にさらなる新天地深草へと移転したのであった【写真三〇】。



【写真二九】定時制高校での授業風景（1960年 卒業アルバム）



立命館中学校・高等学校北大路学舎閉校記念 1988年7月16日

【写真三〇】中高全生徒と教職員による人文字



## 第四章 立命館中学校・商業学校の「御楯の井」

### ―井戸にあらわれた中川小十郎の教育観―

#### 第一節 被災者を救った井戸水

一九三八（昭和一三）年七月三十一日、四国を襲った強力な豪雨は、松山で死者行方不明者二三名をだし、翌八月一日は神戸・三宮で川の堤防決壊などの被害を広げ、一日夜から二日にかけての京都では暴風雨となつて更に猛威を振るつた。

この豪雨によって、京都市内に流れる高野川が氾濫し、川底に引かれていた導水管（上水道のための大鉄管）が破壊したため、松ヶ崎浄水場（四四）からの送水が不能となった。これによって被害者が二五万人にも達したといわれている（四五）。この時の市内では、他にも白川、天神川、安祥寺川などいくつもの川が決壊していたが、導水管の破壊によって、北大路通以北一帯の水道が八月二日夜から全部断水になってしまった。

八月三日早朝、中川小十郎校長の判断と倉橋勇蔵主事（四六）の臨機の処置によって学校の井戸水を付近住民に供給することとして、正門の他に非常門を開放し、給水を開始した。そして、これを広報するために職員を学校周辺の住宅へ触れて回らせた（四七）。掲示板には次のように書かれていた。

「浄水道断水のため飲料水に御不自由の方は御遠慮なく本校の井水をお使ひ下さい」

これにより二、〇〇〇人以上の市民が救われたといわれている【写真三一、三二】。



【写真三一】当時の正門付近の様子  
 「立命館禁衛隊」第86号1938（昭和13）年9月発行



【写真三二】京都日出新聞  
 1938（昭和13）年8月6日付

## 第二節 「御楯の井」と立命館

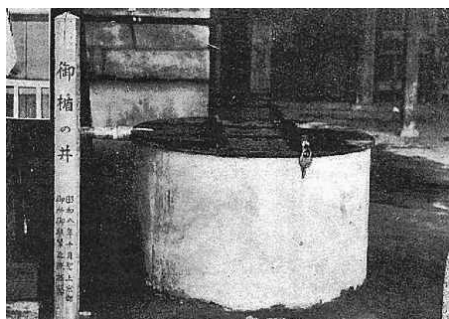
非常用飲料水となった井戸水は、立命館中学校・商業学校では「御楯の井」と呼ばれていた。これは、一九三三（昭和八）年一〇月に天皇が京都に滞在した時に立命館中学校・商業学校の校地内に掘削されたもので【写真三三】、名の由来は万葉集の防人の歌「今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出で立つわれは」<sup>（四八）</sup>に因んで中川校長が命名したのであった【写真三四】。

井戸は、開削後に市の衛生試験所で検査を受け、飲料水にも適していると証明されていたが、立命館中学校・商業学校では中川校長の指示によって、一九三四（昭和九）年九月一日から<sup>みそぎ</sup>禊に使用されていた。禊はその方法からすれば冷水摩擦で、昔からの健康法の一つとされていた。それを中学校・商業学校では、中川校長が禊と呼んで、神官が神に奉仕する前に身を清めるといふ大切な行事と同じように心を清める修行とし、体も鍛える行事として生徒たちに励行させていたのであった。

新入生は、午前七時前に登校し、この禊を行っていた【写真三五】。正門を入れて左手奥に「御楯の井」があり、禊が行



【写真三四】万葉集の歌が刻まれた「御楯の井」の碑  
(立命館 史資料センター)



【写真三三】『立命館要覧』1934（昭和9）年版  
に掲載された「御楯の井」



【写真三五】 褌を行う生徒たち『立命館禁衛隊』  
第58号 1935（昭和10）年11月発行



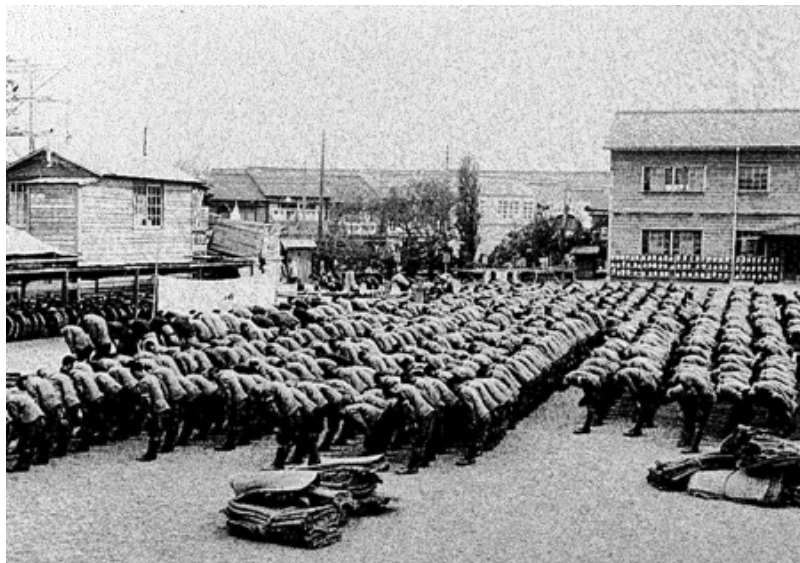
【写真三六】 運動場の境界に建てられていた禁衛隊道場の碑（立命館 史資料センター）

われる校庭の西側は禁衛隊道場の「西の道場」【写真三六】と呼ばれていた。その禊が終われば、全生徒教職員が皇居に向かって遙拝を行うのであった【写真三七】。

立命館中学校・商業学校では、一九三八（昭和一三）年八月に京都市が暴風雨に見舞われた三ヶ月前に、耐火耐震に備えた鉄筋三階建て二、〇〇〇名を収容する校舎（第三章参照）が完成していた。同月には、立命館中学校・商業学校では中川校長の発案で竹製ランドセルを生徒たちに使用させていた。これは国策に沿った目的で皮革の節約をするもので、続いて六月には登下校での下駄や草履を京都府下で一番に実施していた。

鉄筋校舎の建てられた校庭の下には地下道が、将来の戦争に備えて生徒たちや近隣住民が避難できる防空壕にもできるように造られていた。「御楯の井」もこれにあわせて更に掘削を進め、ポンプによる汲み上げと配水管と蛇口などが備えられていた。これによって、生徒たちが神聖な水として禊に使用していた「御楯の井」は、自然災害による緊急事態にあつて、人々を救う水として役立つことになったのであった【写真三八】。

結局、断水期間は六昼夜続き、八月九日の朝、ようやく上水道の給水が復旧することとなった。中川校長は、未曾有の大惨事となった関東大震災を経験したことで、公共建造物には井戸の設備が必要と以前から読んでおり、今回のような断水がそのよい例となったわけであった。「立命館中学校・商業学校の非常給水の状況は、鈴木敬一京都府知事を通じて荒木貞夫文部大臣（第一次近衛文麿内閣）へ報告」されたと記されている【四九】。



【写真三七】 禊の後、皇居に向かって選拜 1934（昭和9）年頃  
生徒たちの向こうに並ぶのは禊のための個人用バケツ



【写真三八】 臨時の給水所の様子『立命館禁衛隊』第86号

### 第三節 その後の「御楯の井」

終戦後、この「御楯の井」は、連合国軍総司令部による検閲を恐れた学校関係者によって早急に埋め立てられてしまった。後には、井戸があつて銃などの武器が投げ込まれて埋められたという話だけが伝説のように長く語り継がれたのであつた。井戸がなくなつた後、「御楯の井」の碑は、北大路の校舎の片隅に置かれ、生徒たちのベンチとして愛用されていた。深草キャンパス移転に伴つて移されたが、通用門の横で誰にも気づかれない状態で放置されていた。現在は、戦前の貴重な学園史を語る資料として史資料センターに移され、ひっそりと保存されている【写真三九】。



【写真三九】「御楯の井」が刻字された碑  
(立命館 史資料センター)

## 第五章 付属学校と中等学校野球

### ―学監小西重直と校長中川小十郎にみる体育・スポーツ（野球）観―

#### 第一節 立命館と中等学校野球

すでに第一〇〇回（二〇一八年開催）を越える全国高等学校野球選手権大会（一九四二年から四五年は戦争のため中断）は、「夏の甲子園」とも呼ばれ、その歴史から高校生スポーツのひとつの象徴として発展してきた。旧学制が残る一九四七（昭和二二）年までは全国中等学校優勝野球大会（以下、全国中等野球大会）

という名で開催されていた。立命館の付属学校は、この全国大会代表を決める京津大会（一九七二年までは京都と滋賀との代表一校が全国出場）に一九一五（大正四）年第一回大会から一九三五（昭和一〇）年第二一回大会まで連続出場していたが、翌年の第二二回大会から不参加となっていた。戦前の全国大会には、夏の大会二回、選抜大会で一回出場している。

立命館が中等野球大会の参加校に再び名を連ねたのは、戦後に再開される一九四六（昭和二一）年の第二八回大会（大会名は翌年から全国高等学校野球選手権大会に改称）からとなる。

## 第二節 野球部の創設（運動部の草創期）

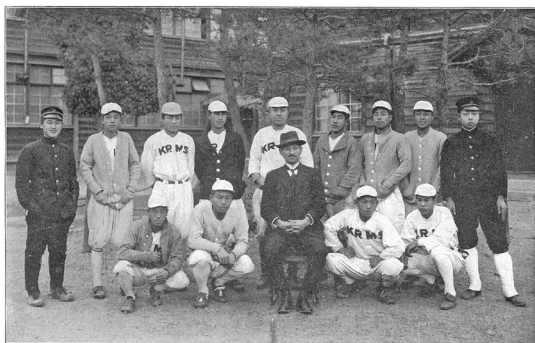
現在の立命館高等学校硬式野球部（全国的に戦前の中等学校は主に硬式野球）は、立命館中学校・高等学校の前身である私立清和普通学校が設立された翌一九〇六（明治三九）年、清和中学校の開校時には創設されていたとされている（五〇）。

創部からしばらくは、熱心な卒業生たちが時々技術指導にきてくれる程度であった。一九一三（大正二）年、清和中学校から私立立命館中学へと校名



立命館中学校  
第一任 小西重直 学監

【写真四〇】  
学監小西重直



立命館中学野球部

【写真四一】中学校野球部の最古の写真（広小路学舎時代 1917年）胸のKRMSはKyoto Ritsumeikan Middle Schoolの略（「立命館中学の過去現在及び将来」）



が改称され、京都帝国大学から教育学教授小西重直が学監<sup>(五二)</sup>として就任した。

その時の学校の教育方針の中に「運動を奨励し元気を振起せしむること」という目標も含まれていた<sup>(五三)</sup>。しかし、現実の運動部の活動は容易に結果がだせず、小西学監が就任して三年目の当時の新聞には次のような厳しい記事が書かれていた。

「市内の私立中学では、立命館中学、東山中学等は未だ運動部として見る可きものがない。殊に立命館中学の如きは市内各中学の運動部に其の存在さへ認められて居らぬ。」<sup>(五三)</sup>

### 第三節 大正後期における野球部の隆盛（運動部の黄金期）

小西学監は、運動部の活動は「生徒の自治にまかせ学校は成るべく之に干渉せざるを方針とし」、学校としては「運動各部の発達につきては出来るだけこれが奨励と援助」とをおしまないと考えていた。そして、野球部には「勝負の念に駆らるるや徒に目的のため手段を択ばざる陋劣狡獪ろうれつこうかいの風に陥り、又、いわゆる応援団なる者の粗暴野蛮の行動に出づる等の憂なきにあらず」（陋劣狡獪ろうれつこうかい＝卑劣で悪賢い）とその問題点を指摘しながらも「本校は深くこの点を戒め、選手も応援者も共に正々堂々の態度を執らんことに努めしむ」と特別の指導を進めるとしている<sup>(五四)</sup>。

その後、小西実践は学習面で進学率向上の大きな成果を出すだけでなく、運動面でも着々と成果を上げるようになり、就任一〇年後には驚くような結果を残すことになった<sup>(五五)</sup>。野球部だけをみても全国大会予選の

京津大会では以下のような戦績を残している。

立命館中学は、一九一四（大正三）年からの奈良遠征に始まり、大阪や名古屋、東京にまで遠征を行うようになり、京都の三高や大学へ進学後も野球を続けている卒業生たちが練習でのコーチを担当し、その実力を高めるようになった（五六）。

そして一九二二（大正一一）年、ついに立命館中学は彦根中学（滋賀）に勝利して初の全国大会出場権（第八回大会）を獲得したのであった（表六）。

#### 第四節 立命館中学の全国大会での活躍

当時の全国中等野球大会は兵庫県の鳴尾球場（現西宮市）で開催されていた（五七）。中等学校野球への人気は年々高まっていて、第八回大会の予選参加が二二九校（第一回は七一校）で、全国各地の予選を勝ち抜いた代表一六校（満州と朝鮮の代表も含む）での開催であった。高まる野球熱によって不正参加が発生したため、予選から参加規定が厳しく改正されるようになった（五八）。

立命館中学は、一回戦で南満州工業を六対三で破った。二回戦（準々決勝）の相手は、大会連覇を狙う和歌山中学。一対四での敗戦であったが、優勝候補を相手にしての善戦だったといえる（表七）。

この試合が終了して退場の際、立命館の選手と応援団一同が場内清掃（ゴミ集め、清掃など）をしたこと

表六 第10回までの大会出場成績

大会			京津大会
第1回	1915年	大正4	1回戦負け
第2回	1916年	大正5	ベスト4
第3回	1917年	大正6	ベスト4
第4回	1918年	大正7	ベスト4
第5回	1919年	大正8	1回戦負け
第6回	1920年	大正9	ベスト8
第7回	1921年	大正10	ベスト4
第8回	1922年	大正11	優勝
第9回	1923年	大正12	優勝
第10回	1924年	大正13	準優勝

- \* 第1回大会に参加した京都の私学は、立命館、同志社、大谷、東山、平安の5校。
- \* 第4回は地方での予選大会後に米騒動が起こったため、全国大会は中止。

が立派な態度であったと翌朝の新聞に報道され、大会関係者からも大きく賞賛されている（五九）。当時の立命館では、「応援が一般的に節制なく粗暴野卑に流れやすく、秩序を乱し競技の妨害となりやすいとして、予め責任者を定めて応援歌を合唱し、個人の気ままな放言を禁じ、勤め（マツ）て節制のある行動をとらねばならない」（六〇）とし、野球の応援に野次と喧嘩が絶えなかつた当時にあつて、応援マナーとしてのフラインプレーを行つていたことには驚かされる。

小西学監によつて、スポーツは勝敗のみを追求するためだけのものではなく、生き方を学ぶものという教育が当時の立命館中学で行われていたとも考えられるのではないか。大会では立命館を破つた和歌山中学が優勝し、大会史上初の連覇を果たした。

翌一九二三（大正一二）年、立命館中学は京大大会決勝で京都一商を破り、第九回全国大会への連続出場を果たした。全国出場祝賀会の最後には、立命館応援団は阪神電車鳴尾駅に集合して隊伍を整えて会場へ練り込む予定だと発表された（六一）。その応援歌も生徒から募集したもので定めた。大会当日には、隊列を整え立命館応援歌を合唱して球場へと向かつたのであつた。

表七 対和歌山中学対戦成績

	安打	本塁打	三振	盗塁	失策	得点
和歌山	4	2	3	0	7	4
立命館	5	0	11	0	4	1

## 運動部応援歌

一、いざや立て我が立命の

鍛へたる腕をためすは

いざや立て靈香高く

健児等の向上の意気

いざや立て音にも聞けよ

覇者たらん我立命の

ララララ リツメイ

二、健男児比叡風おろしに

この時ぞ振へや振へ

梅檀まんだんは既に芳し

天を衝く振へや振へ

目にも見よ是関西の

健児等ぞ振へや振へ

ララララ リツメイ

ララララ リツメイ

ララララ リツメイ

予選参加校は前年よりも更に増えて二四三校で、全国大会出場は代表一九校。人気はさらに高まり、野球場への観衆も大きく増えた。開会式での演出効果として初めて飛行機の祝賀飛行が行われ、始球式用の新球が投下されたのであった。

一回戦不戦勝で、二回戦は台北一中（台湾から初参加）を二三対四という大差で破った。三回戦の相手は徽文高普きぶん（朝鮮）だった。朝鮮では三・一独立運動（一九一九年）を契機に、高等普通学校におけるスポーツ振興が盛んとなっていた頃で、選手全員が体格のよい朝鮮人の

表八 対徽文高普対戦成績

	安打	三振	四死球	盗塁	失策	得点
立命館	7	7	6	4	5	7
徽文高普	3	10	6	5	6	5

チームで、その活躍を期待して大阪や神戸に在住の多くの朝鮮人が応援に駆けつけていた。興奮が渦巻く大観衆の中、立命館の選手たちの緊張感さらには高まって試合は開始された（表八）。

この時の立命館の戦いぶりが、徽文高普の特徴と併せて次のように紹介されている。

徽文高普は、荒削りであったが、腕っ節が強く、人々を面食らわせたのはその走塁で、「球が目の前に見えてなければ何でも突つ走る」と評判されていただけに、走りに走りぬいた。相手になった立命館は、走者を三本間にはさんだが、普通なら途中で止まるかとの予想を闇雲に走られてしまい、ついに送球する間を失って追いかけたところ追いつけず、本塁を奪われて、何てまずい挟撃の仕方だ

などと酷評された（表九）。それでも三回戦に勝利することができたのであった。

四回戦は準決勝で、八月十九日の日曜日午前一〇時が試合開始予定だった。相手は初出場ながらも勢いにのる神戸の甲陽中学。地元の出場とあって、徹夜組のファンが早朝から仮設スタンドを占領し、ロープが張られただけの外野席からは、押された観衆がどんどんと場内になだれ込んでしまうということになってしまった。そのため試合開始が一時間以上も遅れてしまい、大会関係者は準決勝の第二試合の開始時間を早めて第二グラウンドで行い、観衆を分散させることで混乱の収拾につとめたほどであった。

連続出場で実力も評価されていた立命館であったが、相手応援団の大声援にのまれたのか、選

表九 対甲陽中学対戦成績

	安打	三振	四死球	盗塁	失策	得点
甲陽	15	7	3	9	4	13
立命館	8	8	3	3	8	5

手たちの失策が多く、大差をつけられての敗戦となってしまうた（表九）。甲陽中学は、この勢いで決勝も勝利し、初優勝を果たしたのであった。

敗れはしたものの、レベルの高い関西にあつて立命館中学の実力と健闘とは、全国的にも知られるようになった。

この一九二三年にはようやく立命館大学に野球部が誕生している。弟分になる立命館中学が先に全国大会で活躍していたことが刺激となつてか、学生たちの間にも野球熱が湧き上がってきたのかもしれない。

一九二四（大正一三）年四月には、後に春の選抜大会となる第一回全国選抜中等学校野球大会が名古屋の山本球場で開催されることになり、前年の実力を評価されて選抜される八校に立命館中学も選出された。しかし、残念ながら一回戦で実力校の愛知一中に三対一六の大差で敗れ去ることとなった。

その後は、全国大会三年連続出場をかけて第一〇回全国大会予選大会に臨み、準決勝で平安中学を二三対〇で破る快進撃で決勝へと進んだが、同志社中学に四対六と逆転されて敗れてしまった。これによって、三年連続出場と、完成した甲子園球場<sup>（六三）</sup>での最



【写真四二】日常のすべての運動部が活動を行っていた狭隘な北大路校舍木造時代の中学校校庭（1933年卒業アルバム）野球部は練習不足を補うため、東寺中学の運動場などを借用して合宿などを行った。

初の出場校という二つの夢は消えてしまったのであった。

なお、甲子園で校歌斉唱が行われるようになったのは、春の選抜大会が一九二九（昭和四）年から、夏の大会は一九五七（昭和三二）年からであったため、立命館中学が勝利した時に球場で校歌は歌われていなかった。

例え歌われていたとしても、現在の学園歌が誕生する以前に制作されていた立命館中学の校歌だったことになる。

### 第五節 立命館中学の大正黄金期以降の中等野球

一九二七（昭和二）年八月、小西学監退任後は学監という職はなくなり、主事が校長と改称された。翌年四月には館長に就任した中川小十郎が校長を一年間だけ兼務している。

その後の野球部の活動は、「立命館学誌」や「立命館禁衛隊」に見ることができる。監督には、かつて全国大会で主将としてプレーした卒業生の米田虎雄（大正一二年旧中卒。京都薬学専門学校進学）が就任し、全国大会出場を目指して練習に励んでいる。その指導ではルールを守り、礼儀やマナーを厳しく教えられている。 「立命館学誌」には次のような紹介が残されている。

「規律の正しさと紳士的プレーは遂に朝日スポーツ記者をして、大会の亀鑑との替辞を呈せしめ、運動競技を通じての人格陶冶の好模範とまで称せられた。特記すべきは我がナインが大会中、終始挙手の礼で

通したことと、胸間に国字<sup>マ</sup>（六四）のマークを印して群る各校選手中に異彩を放ったことである。本年の我が選手は何れも下級、殊に二年級を中心として作られた大会中、稀に見る愛くるしいチームである。」（六五）。

当時の野球ブームが全国的に過熱化していたにもかかわらず、選手登録一三名中二年生六名、三年生三名、四年生四名という編成は、中学校が五年制の当時にあつては、戦力的に厳しいものであつた。

中川校長の後任は、卒業生で教員となつていた塩崎達人であつた<sup>六六</sup>。母校愛に燃える塩崎校長は「野球部を語る」と題した文章のなかで、当時の学校教育における野球部の課題と立命館精神とはどのようなものを語っている。塩崎校長の次には再び中川校長が登場することになるが、この文章によつて、中川校長再登場までにおける立命館中学校の教育の特徴をよく知ることができる。（以下は抜粋）

### 一、野球部の根本精神

野球を介して立命館主義の訓練を行う。

### 二、選手の人選方法

修学の都合上、主として下級生の中から学業成績「中」以上の者で、心身よく長期の鍛錬に耐えられる初心者を選ぶ。

### 三、訓練について

練習は雨でも毎日二時間実施。指導者には敬礼し挙手の礼をすべし。球場に於ける動作は全て学校



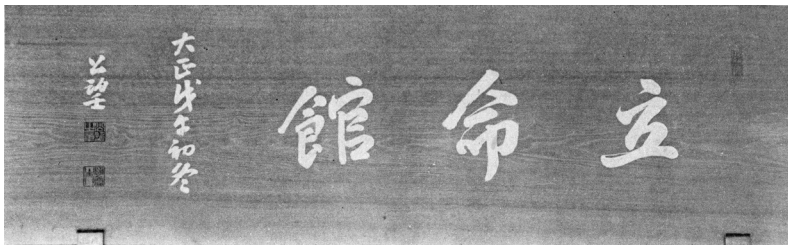
教練に準ずべし。練習は中学生としての基本のもので、高等学校のようにハイカラなことは行わない。

#### 四、服装について

野球衣（ユニフォーム）は質素なる無地白色で、胸章は立命館の三文字を用いる。現在のものは、カツラギ地の上下に白色の帽子、木綿の白色靴下で、その質素なこと天下無比と信じている。着るもので拙攻が定まるものではない。

胸章は、以前はローマ字綴りでリツメイとしていた。米田監督が全国大会に出場した時もこれであった（六七）。その後、数年は帽章をそのまま胸章に使用してきたが、今回いよいよ立命館の文字を用いることにした。この胸章によって国粋チームの名を頂戴すれば、逆に、反動？や獵奇？などと批評もされた。われわれの心持はそのようなものではない。この文字は、二年前に学校の守り本尊として中川館長によって講堂正面に掲げられた西園寺公望公筆の扁額の文字【写真四三】で、立命館のすべての歴史はこの扁額のもとに展開されていく。人気取りのための策などではなく、立命ツ児の心持は立命ツ児のみぞ知るである。

これは野球部に限られた問題ではない。諸君ともどもに各方面に於いて



【写真四三】中学校の講堂正面に掲げられた西園寺公望公の扁額（1928年）

立命館らしい立命館をつくりあげる工面をしようではないか。

以上抜粋 (六八)

この時の立命館中学校について、当時の新聞が次のように紹介している。

「出場三四チームの中、異彩を放っているのが立命館チーム。ユニホームは漢字で右書き斜めに立命館と印し、挨拶は必ず軍隊式の挙手の敬礼。中澤委員長の訓示に対し挙手の答礼をなし、満場拍手して厳肅さに讃辞を呈す。」(六九) 【写真四四】

立命館中学校の野球部が、スポーツとしての技能向上よりも、心身練磨のための場と変化していったことがわかる。なお、ユニフォームの校名は中学陸上部でも同様であった【写真四五】。

当時の野球人気は、日本全国、小学生から大学生まで過熱気味に広がり、文部省が規制の方向へと動くこととなっている。というのも、新聞社などがこの人気熱を利用して興業的に利用し大会を無秩



【写真四五】上段の中学校陸上部の胸には襷がけに書かれた校名（1931年）  
写真下段は商業学校陸上部。両方の中央に写る髭の人物が塩崎校長



【写真四四】人々を驚かせた斬新なチーム名（1930年）京阪電鉄京津線沿いを歩いて緑ヶ丘球場（滋賀県大津市藤木）へ向かう生徒たち

序に増加させていたのであった。そのため文部省は、これらを制限して府県の体育団体に管理されるようにした<sup>(七〇)</sup>。この点では、全国的野球ブームが過熱化していくなかにあって、立命館中学校野球部の活動は異色の存在であったといえる。

その後の立命館中学校は、第一一回大会以降の予選京津大会で上位に残れない時代が続いた。次にベスト八以内に名が出てくるのは、一九三二（昭和七）年の第一回大会での立命館商

業学校<sup>(七二)</sup>で、これが戦前でのベスト八の最後となった。その翌年の卒業アルバムには校名のデザインが再び変更された姿が写っているが【写真四六】、その理由は不明である。

ここまでに登場したユニフォームの胸の校名を見ると、三〇年ほどの間にローマ字表記の「KRHS」から漢字表記「立命館」へと移り変わっている。その変遷のなかにも立命館中学校の目指していた教育の姿を見ることができるのであった。

#### 第六節 中川小十郎校長と野球（西洋スポーツ）

ここまでの立命館中学校野球部の活躍は、創立者中川小十郎が館長として専念する一九二五（大正一四）年八月以前のことである。一九三一（昭和六）年になって中川は初代総長に就任し、学園の運営に本格的にのりだした。そして、一九三三（昭和八）年八月から一九四一（昭和一六）年三月までの間、中川は総長と



【写真四六】再び変更された胸の校名（1933年中学校卒業アルバム）

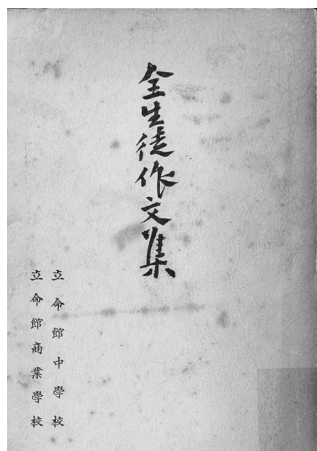
中学校・商業学校校長を兼務し、中等教育の経営とその発展に積極的に取り組んでいった。

この中川校長在職中に、立命館中学校では運動競技に対する方針が大きく変更されていった。一九三三（昭和八）年一月一七日、就任早々の中川校長は、京都府男子中等学校陸上競技大会（植物園グラウンドで開催）に三年生以下を、また同日に開催された全立命館学園大運動会（立命館上賀茂グラウンド）に四年生以上をそれぞれ全員参加させている。その翌日には生徒約一、二〇〇余名全員（不参加者も含め）に演習的的作文を書かせ、優秀作品には賞を与えている。そして、生徒全員の作文集を作成して一二月には全父母に配布するというような指導を行っている。

その主旨は、対抗戦や体育的行事に全生徒で取り組み、生徒たち一人ひとりの意識を高揚させ、教員全員で理解していこうというものであった。ここには、中川校長の運動・体育への積極的な受け入れ姿勢を見ることができるのであった。

このような中川校長が、その後には全く反対の方向へと進んでいったのである。

一九三五（昭和一〇）年の九月にはその変化がはっきりと示されている。まず、「勉強の第二学期が来た」との題名で書かれ



【写真四八】中学校商業学校生徒全員に書かせた作文集（1933年）



【写真四七】校長兼務の中川小十郎総長

た校長公示の中で、

「運動競技の場合などは最後の五分間を非常に重んずるが、人生の成効マツはそんな軽々しいことで獲られるものではない。これも、私が競技運動に感心しない事由の一つである。(中略)最後の五分間主義は点取り主義だ。試験にさえ合格すればそれでよいとする主義だ。そして、この主義が進展する場合にはそれがカンニング主義となるのだ。」(七二)

日々の努力をコツコツと積み上げるのが立命館の生徒であるとして、試験におけるカンニング行為を退学処分すると決定したのであった。また、同じ九月からは、毎朝授業開始前に冷水で上半身を清める「禊行い(第四章参照)、生徒たちの心身を清める行事として励行させている。

また、一九三五(昭和一〇)年第二学期始業式で中川校長は

「本校では生徒の勉強の妨げとなる様な事は一切やらぬ積りである。即ち、運動会廃止は勿論、市内中等学校の連合競技会等にも参加を御断りするのである。(中略)立命館は天下の立命館である。区区たる京都一地方を目標としているのではない。従って市内各学校の連合競技会だの對抗仕合マツなどに依って、勝ったの負けたのと騒ぎ立てる様な根性ではだめだ。諸君の本校に学ぶ目的は、天皇陛下の爲め、国家の爲め、世の爲め、人の爲めに大いに仕事の出来る人間となる事である。諸君はその積りでしっかり勉強せ

ねばならぬ。」(七三)

と改めて運動スポーツに対する考えを生徒たちに述べている。

このような考えによって、立命館は翌一〇月に植物園グラウンドで開催された京都府男子中等学校陸上競技大会への出場を辞退した。二年前には三年生までの全員に応援させた大会への学校不参加は、世間からも驚きの目で見られたようで、一九三六(昭和一一)年三月に市内小学校長を招待した場で改めて、中川校長は学校としての方針を以下のように説明している。

「私の考では学校が学校として行ふべき事は極めて多く、貴重なる時間と充分でない費用とを投じて迄スポーツを行ふ程スポーツそのものに価値がないと思ふのである。特にスポーツを選手制度の下に行ふことは極めて面白くない。学校はあくまで学業を主としスポーツとしては日本固有の武道によって身心を練る方が肝要である。」(七四)

更に四月の中学校・商業学校入学式で父兄への挨拶のなかでも

「この学校では、運動といふものを全然認めないのである。野球も、庭球も、陸上運動も一切やらない。何人かのは運動を楽しみ、後の大多数のものが、応援団などといって騒ぎまはるのはくだらぬこと

ではないか。この学校では運動はやらないが、武道をやる、武道は精神の鍛錬にもなるからである。武道の内剣道をやる。柔道はやらない。柔道は、武士道鍛錬の正規の課業になっていないからだ。」

と述べ、明確に立命館の付属学校では選手中心の西洋スポーツを断固実施しないことを表明したのであった。<sup>(七五)</sup>

一九三六（昭和一一）年四月、野球、庭球、籠球（バスケットボール）、排球（バレーボール）、陸上に柔道を加えた六つの運動競技が立命館中学校・商業学校の生徒スポーツから削除された。当時の新聞には、「全スポーツを排撃する 日本唯一の愛国中学」との見出しで立命館中学校・商業学校を大きく紹介している。<sup>(七六)</sup>

これらの学校の決定に対して、生徒たちはどのような反応を示したのだろうか。これについては同日の新聞記事の中で

「当時、野球部員は学校横暴を鳴らして同盟休校などの措置に出ようとしたこともあったようだが、新時代の潮流の前には施す術もなく、今ではこれら選手が中堅に転じ皇室中心の奔流となっている。」

と、生徒たちも協力的であったと伝えられている。このような表現にも当時の付属学校の姿が見えてくる。こうして、野球のダイヤモンドは取り払われて教練場となり、庭球、籠球、排球等のコートは銃剣道、槍術の道場となり、ボールやネットがすべて銃、背囊、飯盒はいのうに変わってしまったのであった。

中川校長の教育方針によって、中学校や商業学校の体育や運動は大きく変わってしまった。野球だけを見ると、戦争による中断よりも早く、一九三六（昭和一一）年をもって中学校・商業学校に野球を禁止しているが、同じ立命館学園にあって大学は違っていた。一九四三（昭和一八）年四月に文部省が発表した「戦時学徒体育訓練実施要綱」によって東京と関西の大学野球連盟は解散となり、野球ができなくなったのである。四月二十九日に京都の西京極球場で開催された「立同戦」が最後の大学野球となった（七七）。

創立者中川小十郎が小西重直と共に目指そうとした立命館での中等教育が、大正から昭和にかけて大きく変化したことは、今回の野球部の歴史を辿るなかでも明らかになった。中川総長が校長を兼務しながら目指した中等教育における生徒像の分析は、今後の中川小十郎研究にとっても課題となっていくと考えられる。

## 第七節 最後に

現在、立命館中学校・高等学校に保存されている一九三九（昭和一四）年の中学校卒業アルバムの中に一枚だけ不思議な写真が掲載されている【写真四九】。ユニフォームの胸には二つのチーム名。帽子には異なるけれどもRのマーク。立命館中学校の制服制帽姿のま



【写真四九】1939年の中学校卒業アルバム



まの生徒も写っている。背景の山々からグラウンドは植物園のようである。中川校長によって野球禁止が決定された後の卒業アルバムで、学校の点検も受けているにもかかわらず、なぜこの生徒たちの写真が含まれているのか。禁止後もなお野球に取り組んでいた生徒たちがいたことは確かである。卒業アルバムでは軍事教練に関する写真が大部分を占める中に、このような写真が一枚含まれていたことに救われる思いがする。

## 注

(一) 「中学校令施行細則」一九〇一(明治三四)年制定

(二) 「京都日出新聞」一九〇五(明治三八)年九月一〇日付『立命館百年史 通史一』

「中学校と同じ課程にて普通学を授け、就中、外国語数学及び国語等の如き学力の基礎となる科目に最も力を用ひ、将来高等なる学校に進入せんことを目的とする者に、必須適當なる授業を施すものとす。」

(三) 私立清和中学校学規則 前文

「特殊ノ教育主義ニ於テ(前略)寧ロ将来進シテ高等ナル教育ヲ受ケントスル者ニ対シテ適切ナル教授ヲ施スルヲ以テ主眼トスルコトナレハ他日高等学校(中略)海陸軍諸学校等へ入学セントスル志望者ニ対シテ他ノ一般公立ノ中学校等ニ比シテ便宜多カルヘキハ本校ノ信シテ疑ワサル所ナリ」

一九〇七(明治四〇)年六月二五日付の徴兵猶予の認定申請の際に京都府へ提出(京都府公文書)

(四) 吉村友喜は、一九〇七年一月に就任するも同年三月には退職して第三高等学校教授となっている。

(五) このうち花房俊静は一九〇七年五月に退職し和歌山県立粉河中学校へ、妹尾勇は一九〇七年三月に退職し石川県立武生中学校へ移っている。

(六) 『立命館百年史 通史一』

(七) 学監とは、「本校教育の方針を樹立し、且つ教育の全体を監督指導し、又本校と立命館本部及同大学とに關係せる重要な協議に關与する。」と説明されている。(『立命館中学の過去現在及び将来』一九一八年三月発行)

(八) 「中川立命館長演説」 中学部第二〇回卒業式

〔前略〕 我立命館中学におきましては深く此点を注意し教育学の大家である小西博士を学監に依頼し各教員の指導を託して居るのであります、僭越なる云分かもしれないが此の点において全国中学校に対し一の模範中学校たることを以て窃に期して居るのであります。』

『立命館学誌』 九四 一九二六年四月)

(九) 「京都日出新聞」一九二〇(大正九)年三月一〇日付

(一〇) 「京都日出新聞」一九二一(大正二〇)年三月二九日付

(一一) 『立命館中学の過去現在及将来』

(一二) 立命館中学編入生徒募集案内『立命館学誌』第九号 一九一七(大正六)年三月発行

(一) が前年度から追加された教科幾何は第四学年志望者、代数は第三学年以上の志望者に課された。

(一三) 同窓会誌『清和』第三号 一九一三(大正二)年二月発行

秋の清和中学校同窓会での催し物のなかには、在校生による英語による朗読、暗唱、寸劇などが行われていて、主なものでは「英語による伊勢参宮修学旅行」などが紹介されている。

(一四) 同窓会誌『清和』によれば、退職後の消息として、ガッピは平安女学院へ転職後に東京へ転居(一九一八年の同窓会誌『清和』には故人と記載)。カスパートは聖護院に居住していたが母国へ帰国したと記載されている。

(一五) 「京都日出新聞」一九〇八(明治四一)年四月二一日付

〔前略〕 因に英語科教員として英国婦人を一名雇入れたりと。』

1917 (大正 6) 年度 立命館中学編入生徒募集試験時間

	4月5日	4月6日	4月7日
午前8時～9時	英訳	英文法	算術
午前9時～10時	国文法・作文	国語	英会話・書取
午前10時～11時	(図画)	(博物)	(歴史)
午前11時～午後0時	(地理)	(修身)	代数
午後0時～1時半	幾何	漢文	

保存されている資料と整合しないが、この婦人がサウターと考えられる。当時として外国人の女性教員を採用するのは大きなニュースであったようである。

(二六) 『立命館中学の過去現在及将来』

(二七) 吉村主事の祝辞『立命館学誌』第一〇〇号 一九二五(大正一五)年一二月発行

一九二六(大正一五)年一月二二日に行われた中学校創立二〇周年の祝賀祭典では、全校生徒教職員の前で、勤続年数第一位二〇年の小谷時中(前職は吉田中学校で廃校によって清和中学校採用となる)に次ぐ第二位の勤続一七年で感謝状が贈られている。その次に続いたのは学監小西重直の二二年であった。

(二八) 『京都日出新聞』一九二八(昭和三)年四月二日付

見出し『中学校に女教員 我市では最初の試』

「立命館中学では新学年から英語科に婦人教員を採用することとし三年級にはサウター氏、二年級一年級は高田久榮女史担当し、主に発音読方会話を受持つ由、中学校に婦人教員を採用する例は他に一、二あるが我京都府下では立命館中学が最初のものであると云ふ。」

(二九) 江戸城内の天皇の居所を皇居と称していたが、一八八八(明治二一)年旧西の丸に宮城を新築されてからは、宮城と呼ばれていた。

(二〇) 宮城遥拝は、天皇への尊崇の念を高め、日本国民の団結力を強める意味をもって、宮城に向かって最敬礼する行為で、戦前には国内外で盛んに行われた。

(二一) 和歌山県出身で数学担当。和歌山県、新潟県、奈良県、滋賀県や陸軍幼年学校の教員を経て、一九三三(昭和八)年に四十七歳で立命館商業学校に就職した。立命館では生徒監などを勤め、一〇年後に退職。

(二二) 中川小十郎は、館長となった一九二八(昭和三)年四月から一九二九(昭和四)年二月までに中学校校長、一九三三(昭和八)年八月から一九四一(昭和一六)年三月までは総長との兼任で中学校・商業学校校長。

(二三) 上田 穰(一八九二〜一九七六) 日本の代表的天文学者。東京帝国大学理科大学卒業後にアメリカ留学。帰国後

の一九三一（昭和六）年に京都帝国大学教授となる。その翌年に中川小十郎から方位標を依頼されている。その後、かさん花山天文台長や生駒山太陽観測所長を務めていて、一九五三（昭和二八）年に発見した小惑星には「二六一九JCS」と命名されている。

(二四) 立命館中学校・商業学校では、一九三二（昭和七）年九月一五日から毎日始業前、禁衛隊記念として、既に実施していた合同体操に先立ち、職員一同が校庭に集合して、東方向に向かって朝拝という行事を行っていた。

(二五) 水銀を用いず、小型軽量の構造で取り扱いが簡単なため、温度計と一体化したのもや、気圧と高度の対応ができる登山用高度計として使用されている。

(二六) 三重県出身。書道担当。小学校や高等女学校の教員を経て、一九三三（昭和八）年一二月に中学校・商業学校教員に四〇歳で就職。その直後に方位標の揮毫にあたっている。五年後に退職。

(二七) 銅と錫の合金で、靱性に富むため大砲の砲身の材料などに使用された。

(二八) 第二代立命館清和会会長木村嘉一氏「立命館とともに」（立命館中学校高等学校『八十年の歩み』一九八五年）「校舎が建てられたが、運動場が狭いのに気付き、清和会が田二反を購入して寄付するにしました。坪五円で金額三千円であったが、二千円は直ちに集まったものの、残り千円は五カ年計画で集めることにしました。そうすると清和会は寄付を集める会となつて、皆が集まらぬ様になる恐れがあるということで、其の千円を免除してもらう様、中川先生にお願いにきました。先生は、学校で代金は支払つてあるから心配はいらぬ、それでよいとおっしゃいました。」

(二九) 現在は京都教育大学付属京都小中学校と京都府立清明高等学校（以前は紫野グラウンドとして立命館中高と京都府立鴨沂高等学校とで府から借用していた）

(三〇) 塩崎達人「北大路線の開通に伴うて」『立命館禁衛隊』第二二号 一九三一（昭和六）年一月発行

(三一) 『立命館百年史 通史一』「学事年報」『京都府公文書』

(三二) 『立命館禁衛隊』第三九号 一九三三（昭和八）年二月発行

- (三三) 「京都日出新聞」一九三四(昭和九)年九月二日付
- (三四) 官立、公立には将校が配属されることになっていたが、私学は学校判断によるものとされていて、申請をするこ  
とになっていた。財団法人立命館では代表理事末弘威磨の名で文部大臣と陸軍大臣宛に公布された一九二五(大正  
一四)年三月三〇日に申請がされていた。
- (三五) 「京都日日新聞」一九三六(昭和一一)年二月二日付(京都日日新聞は京都新聞の前身)
- (三六) 「文部省は学校に対して、年一回の定期健康診断をさせるだけで、これでは健康の管理は出来ない。学校には如  
何にも弱そうな青びょうたんの生徒や学生がいる。こんな人には勉強よりもまず健康だ、体力だと言う考えの下で、  
レントゲン其の他の診察器具を備えて、毎日、医者に診察させる医務局を設けられたのであります。そこでの診断  
の結果を父兄に通知して、治療をさせたのであります。実に先見の明で、其の後十年程して文部省は是を見習ろう  
て、各学校で診察をさせる様になりました。学校内に医務局の設置は、日本中本校が嚆矢(最初)であります」(前  
掲書 木村嘉一氏「立命館とともに」木村氏は中川小十郎の家庭医でもあり、戦後の立命館清和会の再建に奔走し、  
第二代会長として長く職につき、理事長も務めた。)
- (三七) 立命館清和会長本田義英氏からの寄付・学債協力趣意書
- 「(前略) 既に在学生父兄に於ては旧臘(きんろう)來校舎改築期成後援會を組織せられ熱心なる後援をなされつつある由に  
之れ有り。我々三千名の卒業生としても此の際一致協力して、此の難事業に直面せる母校のため、出来得る限り  
の援助を致したく存ずる次第に之れ有り候。就ては御迷惑の至りと存じ候へども、学債と寄付との如何を問はず、  
特に各位の御尽力を願ひたく切に御依頼申し上候(後略)」(立命館清和会 保存資料)
- (三八) 「中川先生は『学校には今金がない、木村お前石原(広一郎)氏、当時の立命館理事)の所へ行つてこのことを相談  
してくれ』とのことで、吉祥院の宅を訪ねて、其由を申しました。氏は『私の取引の第一銀行から私が保証人に  
なつて借入れよう』との話で、これがまつまり、北校舎と講堂が完成されたのであります。」(前掲書 木村嘉一氏  
「立命館とともに」)

- (三九) 後に工業学校となり第四中学校へ統合される。
- (四〇) 『立命館百年史 通史一』
- (四一) 『京都日日新聞』一九三七(昭和一二)年六月二九日付 (現京都新聞の前身)
- (四二) 同右
- (四三) 『立命館禁衛隊』第七七号 一九三七(昭和一二)年七月発行「新校舎への待望」生徒感想より
- (四四) 当時の松ヶ崎浄水場の送水は、三宅八幡、深泥ヶ池、上賀茂、鷹ヶ峰、蓮華谷、金閣寺、衣笠、宇多野、鳴滝、北白川、吉田、鹿ヶ谷と広範囲であった。
- (四五) 『京都日出新聞』一九三八(昭和一三)年八月六日付
- (四六) 一九三〇(昭和五)年四月に立命館中学校教諭。中学校鍛錬部長、立命館第二中学校校長などを経て、理事、専務理事などを務める。
- (四七) 『大阪朝日新聞』一九三八(昭和一三)年八月六日付
- (四八) 万葉集巻二十・四三七三 作者は火長いまつりべのよそふ今奉部与曾布
- (四九) 『立命館禁衛隊』第八六号 一九三八(昭和一三)年九月発行
- (五〇) 『立命館中学の過去現在及び将来』
- (五一) 学監とは、本校教育の方針を樹立し、且つ教育の全体を監督指導し、又本校と立命館本部及同大学とに関係せる重要な協議に関与する。『立命館中学の過去現在及び将来』
- (五二) 「教育の三つの目的」のための「一〇の指導方針」『立命館中学の過去現在及び将来』
- (五三) 『京都日日新聞』『青年の生命は運動だ』一九一六(大正五)年一月二日付
- (五四) 『立命館中学の過去現在及び将来』
- (五五) 「旧制高校への進学者数は、府立中学校と肩を並べるほどになり、相撲部は団体・個人で全国・関西大会を制し、ラグビー部は全国大会準優勝、陸上部は府大会で上位入賞するなど」『立命館百年史 通史第一巻』

- (五六) 立命館中学同窓会誌『清和』第四号〜第九号の野球部報。
- (五七) 第一、二回は大阪の豊中球場で開催。第三回から第八回までが鳴尾球場。
- (五八) 三月までに進級しなかった者(わざと留年して出場する者の防止)、転校編入後満二学期を経過しない者(有力選手を引き抜いてすぐに出場させない)には参加資格が認められないこと、校医の診断による健康の保証が必要という二点が追加された。『高校野球優勝物語』廣瀬謙三・松井一之共著 恒文社 一九七五年発行
- (五九) 朝日新聞 一九二二(大正一一)年八月一五日、八月一八日付
- (六〇) 『立命館中学の過去現在及び将来』
- (六一) 『高校野球優勝物語』廣瀬謙三・松井一之共著 恒文社 一九七五年発行
- (六二) 『立命館学誌』第一三五号 一九三〇(昭和五)年九月一五日発行
- (六三) 第九回全国中等学校野球大会で、観衆の大混乱によって試合運営が困難となったため、十分な観客席を備えた本格的な野球場が早急に必要とされた。翌年の大会に間に合わせるように建設が急がれ、一九二四年八月一日に竣工したのが甲子園球場であった。
- (六四) 国字とは、漢字の字体にならって日本で作られた文字のこと。立命館の文字は国字にあたらぬ。当時は、多くの学校が校名の頭文字だけをアルファベットで表示したり、校名をローマ字で表記していたようで、立命館が校名を漢字で表記したことを強調しなかったのではないかと思われる。
- (六五) 『立命館学誌』第一三五号 一九三〇(昭和五)年九月一五日発行
- (六六) 一九一一年清和中学校卒業。校長在任期間一九二九年四月〜一九三三年七月。
- (六七) 塩崎は、一九二二(大正一一)年に立命館中学教員となっているので、母校の二回にわたる全国大会出場をスタンドで応援していた。
- (六八) 『立命館禁衛隊』第一〇号 一九三〇(昭和五)年九月発行
- (六九) 「大阪朝日新聞」一九三〇年(昭和五)年七月二五日付

- (七〇) 文部省訓令第四号「野球ノ統制並施行ニ関スル件」一九三二(昭和七)年四月一日発令
- (七一) 中学校と同じ北大路の校地に一九二九(昭和四)年開校
- (七二) 『立命館禁衛隊』第五六号 一九三五(昭和一〇)年九月発行
- (七三) 同上「第二学期始業日に方て中川校長の訓示―中学商業三年生以下一同に対して―」
- (七四) 『立命館禁衛隊』第六二号 一九三六(昭和一一)年三月発行  
「小学校長招待日に於ける中川校長挨拶」要旨
- (七五) 『立命館禁衛隊』第六三号 一九三六(昭和一一)年四月発行  
新入学父兄に対する中川校長の挨拶
- (七六) 「京都日日新聞」一九三六(昭和一一)年二月二日付  
「皇室中心主義の旗幟を高く翳し千七百名の生徒と七十名の職員が一丸となり、在来のスポーツといふスポーツを悉く排撃し各人が満身これ〴〵日本精神〴〵に凝っているといふ全国に珍しい中等学校があり、国体明徴の巨弾を教育会に投じている。」
- (七七) 立命館史資料センターホームページ〈懐かしの立命館〉戦前「最後の立同戦」